

第 22 回対照言語行動学研究会 (JACSLA22) 研究発表 概要

2024. 10. 19 開催 於 東京科学大学

タイトル	『訓蒙窮理図解』の天文学分野における 日本語から漢文への翻訳の分析とその考察
著者名 (所属)	アミール 偉・八島 瑠 (福島県立医科大学)
連絡先 E メール	iamir@fmu. ac. jp
<p><b>発表内容</b></p> <p>本発表では、台湾が日本統治下であった 1900(明治 33)年に日本語から漢文へ翻訳された『訓蒙窮理図解(きんもうきゅうりずかい)』内の天文学分野に関し、翻訳理論をベースとして、翻訳により生じる2つの文章間での科学的内容の意味のシフト(ずれ)に注目する。その上で、シフトの発生とその背景について議論・考察し、「西洋科学」の日本語から漢文への翻訳過程と、その特徴や傾向について明らかにする。</p> <p>『訓蒙窮理図解』は元々、1868(慶應4)年に福澤諭吉によって英語から日本語へ翻訳された大衆向けの西洋科学書である。しかし、その後に日本統治下の台湾において、再度翻訳・発刊された点は、それほど注目されていない。先行研究(大浜 2008)はあるものの、植民地教育の一環として同書を捉えるのみで、翻訳過程について言及した研究はほとんどない。</p> <p>本研究で実施した翻訳の解析手法として、(1)言語要素に関しては Toury(1995)が提唱した「記述的翻訳研究」を基に、日本語版『訓蒙窮理図解』(起点テキスト: ST)と漢文版『訓蒙窮理図解』(目標テキスト: TT)を対照させ、翻訳前後での対応文章を比較した。実際には、漢文から現代日本語への再翻訳(Back Translation: BT)を行い、ST と BT を比較した。(2)非言語要素として、同書の中に登場する挿絵の比較も実施した。</p> <p>本発表では、『訓蒙窮理図解』を構成する 10 章のうち、天文学分野の内容が記述されている第 7～10 章を比較対象とした。翻訳分析の結果、漢文版の『訓蒙窮理図解』において、(1) ST に酷似した TT の存在、(2)福澤の語りの消失、(3)話者の視点の切り替え、(4)文化的な要素を落とした一般化、(5)説明の具体化、があることが明らかとなった。現時点では、第 7～10 章のみの結果であるが、日本とは異なる台湾の文化的な背景を考慮した翻訳が実施されていることが明らかとなった。また、挿絵についても、台湾の文化的な背景を考慮した翻訳(描写)の箇所があることが明らかになった。</p> <p>質疑応答においては、実際に翻訳を実施した人物を特定できないか、翻訳の内容を鑑みると 2 名以上で議論を基に翻訳したのではないか、福澤の語りが落ちた理由は、前後の文章との繋がりが関係あるのではないか、などの指摘があった。今後は、序文と第 1～6 章の翻訳分析を実施するとともに、過去の資料からの翻訳者の特定、さらには漢文および科学史(教育史)などの視点も交えながら、考察を深めていきたい。</p> <p><b>参考文献</b></p> <p>福澤諭吉(1868)『訓蒙窮理図解』慶應義塾      臺灣總督府民政部學務課(1900)『訓蒙窮理図解』臺灣日々新報社      Toury, Gideon(1995) <i>Descriptive Translation Studies – and beyond</i>, Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins Publishing Company      大浜郁子(2008)「台湾における植民地的近代教育の形成と書房義塾 – 書房義塾参考書の制定過程を中心として」『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』巻 30, p.107-121, 国際日本文化研究センター</p>	